

地域経済ウォッチング

いわき民報 2010年10月28日(木曜日)

「縁起」に見る現代中国の諸相

新旧価値観の狭間に生きる中国国民

新語が反映 文化を心行くまで楽しむ国民性

東日本国際大学経済情報学部教授

田村 立波

清の全権大使として下関条約の調印に携わった李鴻章が、その後のヨーロッパ列国周遊に棺おけを持っていったことは、よく知られている逸話である。「棺おけ」は中国語で「棺材」といい、「棺」は「官」と同音で、「材」は「財」に通ずる。百余年後の現在の中国でも、「出世して金持ちになる」ことを意味する縁起物として、大小様々な土産品に加工され珍重されている。官僚になることが出世と見なされるのは、今も昔も変わらない。1000年余り続いた中国の官僚選抜試験である科挙を彷彿とさせる中国の公務員試験は、近年も熾烈に繰り広げられ、一部の中央省庁のポストには、数千倍の倍率で多くの若者達がしのぎを削っている。一方「財」への追求は、鄧小平氏による「先富論」の元、「向前看」(前向き)が「向銭看」(カネ向き)に茶化されたように、国民の価値観に大きな比重を占めるようになってきた。

「髮菜」という縁起料理の人気ぶりからも、大衆の心理を覗くこともできる。「髮菜」はもともと中国西北部の草原地帯に生えている髪の毛のような「もずく」の一種だが、その発音が「発財」(金が儲かる)に似ていることから、改革開放後の90年代に入ると、一躍して料理界の「寵児」とされ、「ハレ」の日の食材としてなくてはならないものであった。味はあっさりしてい

て、栄養価値もさほど高くないとされているが、語呂合わせのおかげで名を巻にとどろかせることになった。高値で取引されているのを目の当たりにした地元の農民たちは、農作業を省みずこぞって「髪菜」の採取に出た。そのせいで、草原の砂漠化が進み、わずかな耕地も黄砂に飲み込まれてしまうはめになった。その事態を等閑視できぬ政府は 2000 年に「髪菜」の採取、加工、取引を一切禁止する通達を出すまでになった。それにしても、縁起担ぎの心理的満足を満たすための人間は口腹の欲をやめようとしなない。今、食卓に乗せられているのはほとんど昆布などで作られた「偽物」だといわれている。

北京オリンピックは未だに記憶に新しい。2008 年 8 月 8 日夜 8 時の開幕とは明らかに「8」の縁起担ぎである。8 は広東語で「発財」の「発」と発音が同じだということで、縁起のいい数字とされ、「四小龍」としての香港の凄まじい経済発展の勢いをバックに中国全土に浸透した。今日に至っても、8 のある電話番号やナンバープレートが、とてつもない金額で取引されることがある。現在の中国はもし一つの漢字で言えば、それは正しく「発」なのではなかろうか。GDP は年内、日本を追い越して世界 2 位になるのは疑う余地がない。

だが、縁起に見られる伝統的な価値観にいろいろな変化が生じている。「棗」(早く子供が生まれるように)や「落花生」(男の子も女の子も生まれるように)、「石榴」(子たくさんであるように)などは結婚のとき必ずと言っていいほど用意しておかなければならない縁起物なのである。現実にはほとんどの夫婦は人口政策により一人っ子しかつけれない。その一方、子供をつくろうとしない「ディンクス族」も現れつつある。さらには、結婚を億劫がる「懶婚族」、結婚しようとしなない「不婚族」、結婚を恐れる「恐婚族」も出てきたのである。また、「ギョーザ」や「団子」などのような一家団欒を意味する縁起物も、その縁起的意味が薄れていくような気がしてならない。一人っ子政策により多くの「独居(一人暮らし)老人」家庭をつくってしまう。と同時に、主に経済的理由で一家団欒に帰れないまたは帰ろうとしなない「恐年族」も増えてきているという。

このように、次々と生まれてきた数多くの「新語」が反映しているとおり、中国の国民は新旧価値観の狭間に生きているのである。しかし、なんといっても、伝統を重んじ、縁起を気にするイメージは変わらない。ヨドバシカメラは中国語の社名を音読みで「友都八喜」としたのを聞く。うまく中国人の心理を掴んだ妙訳だと感心する。彼らは物質を大量消費するとともに、文化をも心行くまで楽しむグループなのである。

ちなみに、近年の中国では、「舵」という新しい縁起物が流行っている。学校や会社の入口に目立つように円盤の「舵」が飾られている。その業界をリードすることができるように、また順風満帆であるようにとの縁起を担いでいる。この「舵」は中国をどの方向へ導いていくのか見守っていききたい。

(本コラムは本年度いわきヒューマンカレッジ「現代アジア学部」の内容と一部連動しています。)